

## 『実践のための基礎統計学』 正誤表

(2020年7月20日現在)

第1, 2刷に対する正誤表です。訂正してお詫び申し上げます。

項	列	誤	正
P2	↓1	各購入者のデータを個体という。つまり、今回は100個の個体が存在することになる。このとき、個体の総数を標本サイズ（サンプルサイズ、個体数）という。	各購入者のデータを個体という。このとき、個体の総数を標本サイズ（サンプルサイズ、個体数）という。つまり、今回は標本サイズが100個の個体が存在することになる。
P3	↓2	本書では、「平均的に…」	本章では、「平均的に」
P12	↑7	分散あるいは標準偏差では単位が異なる変数間の・・・	分散あるいは標準偏差ではスケールが異なる変数間の・・・
P12	↑4	受動係数の定義	変動係数の定義
P41	↓3	事象 $A_1$ の余事象の確率 $Pr(\bar{A})$ は	事象 $A_1$ の余事象の確率 $Pr(\bar{A}_1)$ は
P50	↑1	$Var(X) = \sigma^2 = \sum_{k=1}^n (x_k - \mu)^2 \cdot f(x_k)$	$Var(X) = \sigma^2 = \sum_{k=1}^K (x_k - \mu)^2 \cdot f(x_k)$
P54	↑2	これは、確率密度関数の定義2からも平易に理解できる。	これは、確率密度関数の定義および累積分布関数の定義から容易に理解できる。
P56	↑4	チェビシェフの不等式	チェビシェフの不等式
P57	↑5	標本サイズを増やすとき、確率分布の平均 $\mu$ に近づくことを保証することを、大数の（弱）法則という。	確率変数 $X_1, X_2, \dots, X_n$ が独立に平均 $\mu$ の確率分布に従うとする。このとき、 $n \rightarrow \infty$ において確率変数の平均 $\bar{x}$ が $\mu$ に収束する。このことを、大数の（弱）法則という。
P59	↓8	統計学では $x \sim Bin(n, p)$ と書くことが多い	統計学では $X \sim Bin(n, p)$ と書くことが多い
P59	↑7	また、2項分布 $Bin(n_1, p_1)$ に従う確率変数 $X_1$ と $Bin(n_2, p_2)$ に従う確率変数 $X_2$ の和 $X_1 + X_2$ の確率分布は、2項分布 $Bin(n_1 + n_2, n_1 + p_2)$ に従う。	また、2項分布 $Bin(n_1, p)$ に従う確率変数 $X_1$ と $Bin(n_2, p)$ に従う確率変数 $X_2$ の和 $X_1 + X_2$ の確率分布は、2項分布 $Bin(n_1 + n_2, p)$ に従う。
P65	↓7	このとき、 $Pr(6.64 \geq X \geq 12.04)$ をとる確率	このとき、 $Pr(6.64 \leq X \leq 12.04)$ をとる確率
P113	↑6	それぞれ正規分布・・・に従う。	それぞれ近似的に正規分布・・・に従う。